

日本の伝統・文化を継承する若者たち

明日への扉

Door to Tomorrow

会津塗・加飾職人 沼田

Hanae Numata

英恵氏



会津藩の城下町として栄え、戊辰戦争の白虎隊でも知られる古都、福島県会津若松市。この地に、400年以上にわたって受け継がれる伝統工芸が会津塗だ。その魅力は漆ならではの深みのある色合いと艶だが、優美な模様も欠かすことができない。

沼田英恵さん——市内の工房で日々、黙々と塗り物に向き合う彼女の生業は「加飾」。無地の漆に模様を施す仕事だ。「伝統工芸を継ぎたい」との思いを高校在学中に抱き、数ある工芸の中から自分の可能性を探って、たどり着いたのが会津塗の加飾だった。

会津塗の加飾とは、どのような仕事？

沼田「加飾の手順はそれほど手間が掛かるものではなく、とてもシンプルな仕事です。だからこそ、手掛ける人の技そのものが問われると思うんです。材料などでごまかすことのできない、純粋な技術によるところが大きい工芸であることに惹かれてこの世界に飛び込みました」

ひとくちに加飾といっても、さまざまな技法がある。漆に顔料を練り合


日本の伝統・文化を継承する若者たち「明日への扉」

わが国が世界に誇る、固有の伝統・文化の数々……。先人たちが築いてきた、その知恵や技を受け継ぐ若者たちがいる。夢を追いかけ日々研鑽する彼らの「ひた向きで真摯な姿」と普段の暮らしから垣間見える“素顔”をご紹介します。

MOVIE

動画コンテンツ「明日への扉」では、日本の伝統・文化を受け継ぐ若者たちの姿を、臨場感ある映像でご紹介。30人以上のバックナンバーがご覧になれます。

Web版
パソコンやタブレット型端末など各種デバイスでご覧になれます。
<http://www.athome.co.jp/tobira/>

TV
ディスカバリーチャンネル(CS) 
冠番組
「アットホーム presents 明日への扉」放映中
毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン
ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

わせて作った絵の具のようなもので模様を描く「漆絵」。透明な漆で模様を描き、その上に粉を蒔いて色を付ける「蒔絵」。沼田さんが取り組むのは、それらと大きく異なる「沈金」と呼ばれる技法。塗り物の表面を削り、そこに金粉や銀粉などをすり入れて表情を醸し出す。その様が、まるで漆の中に金が沈んでいるように見えることが語源だという。では、沼田さんは沈金のどこに魅せられたのだろうか。

沈金に魅せられたきっかけは？

沼田「沈金は線や点をノミで彫るだけなので、他の技法と比べ物にならないほど表現手段が少ないんです。また、点を一つでも多く彫れば全体のバランスが崩れてしまうくらい繊細で、一度彫るとやり直しはききません。そのような条件下で技を凝らし、自分のイメージ通りに模様を表すのが面白いなと思ったんです」

沼田さんには著名な師匠がいる。この地で沈金を継ぐ数少ない匠の一人、角田弘司氏。伝統的技法を守りながらも斬新な作品は、福島空港に飾られたり、皇室へ献上されたりしている。

師匠からはどのような指導を受けている？

沼田「私が作ったものをご覧になって、も、何もおっしゃらないですね。『良い』

百合咲くや汗もこぼさぬ身だしなみ 諸九尼

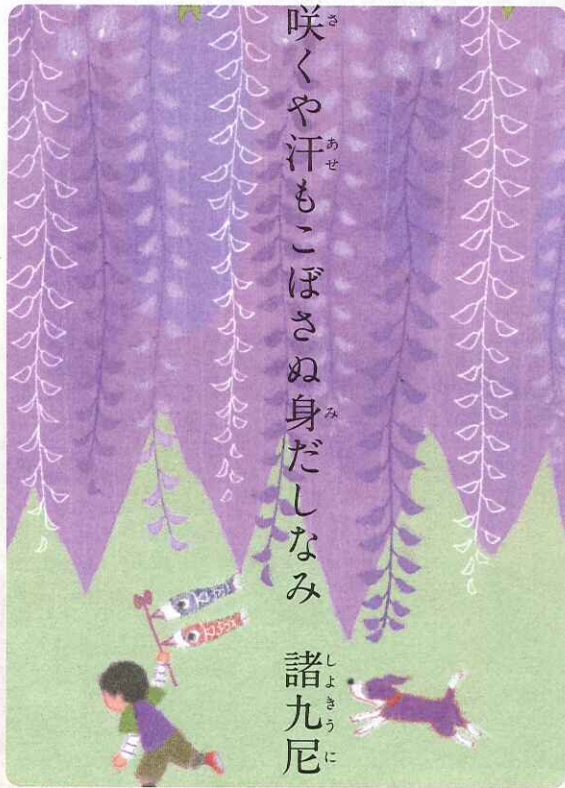


イラスト ひらいみも

福岡県の小倉駅、または若松駅から電車で下った遠賀川流域、筑豊平野のほぼ中央に直方市がある。その山部という地区に浄土宗の随専寺があって、墓所には十八世紀の俳人浮風・諸九夫婦が静かに眠っている。浮風は直方の武家の生まれ。黒田藩士を経て、医業の傍ら芭蕉顕彰の高まりを見せる俳諧に手を染め、片の瀬（久留米市田主丸町）に草庵を結ぶ。そこに大庄屋の嫁が入門。これが後の諸九である。やがて二人は駆け落ちして、大阪・京都で活躍。浮風に先立たれた諸九は剃髪して仏門に入り、諸国行脚を展開して、芭蕉復興運動の中核的な役割を果たすが、晩年は浮風の故郷である直方に帰り、菩提を弔いながら俳諧三昧の

日々を過ごした。駆け落ちという一面を強調する傾向にあるが、気韻生動する作品にこそ目を向けた。掲出句は百合合である。夏の日ざしをあびて咲き始めた花の漂々しさを詠んで、「汗を少しもこぼさずに、まことに身だしなみのよいことよ」と称賛する。通説は「百合の花を前に、作者が身だしなみを整えてたすむ」とするが、賛成できない。百合の清楚な姿には、見る者の心を引きしめるものがあるけれど、人の姿は句に描かれた花の移り、つまり連想として見えるもの。「汗」や「身だしなみ」の語がその役割を引き受けているのだ。作品は『諸九尼句集』による。

東洋大学教授 谷地快一

会津塗



福島県会津若松市を代表する伝統工芸。1590年に、近江から国替えとなった蒲生氏郷が木地師や塗師を伴って会津に移り、椀の製造を領内に広めたのが始まり。その後、会津は漆の栽培から加飾までを一貫して手掛ける一大産地となるが、幕末の戊辰戦争で壊滅的な打撃を受ける。しかし明治中期に再興し、会津は今もなお、日本有数の漆器の産地として知られている。



とか『悪い』といった言葉はなく、『ふん』とおっしゃるだけで。だから『これでもいいのかな』っていつも考え込んでしまふんですが、つまりは『見て覚える』ということなんだと受け取っています。沈金に用いるノミは独特のかたちをしている。刃が鳥の鉤爪のように湾曲していて、ノミを傾け、刃の角度を微妙

今まで作った中で、最も思い出深い作品は？

に変えて彫ることで線や点に変化を持たせるのだが、それは口で教えられたからといってうまくできるものではない。また、イメージする線や点を彫れるよう、ノミを砥石で調整するのも職人の仕事。しかし、特殊なかたちの刃は研ぐことすら困難であり、こちらも言葉で教えられるようなものではない。故に師匠の技を盗んでは試み、失敗してはまた盗む。そのようにして今も修業に打ち込む沼田さんが、「職人として生きたい」という思いをより強くするきっかけとなった作品があるという。

沼田「故郷の茨城県に縁のある、『あんこう』を描いた大きな漆パネルの作品ですね。弟子入りから3年目のころに師匠の勧めで作りました。ある展覧会で賞までいただいたんですよ」



粗い彫りと細かい彫りを織り交ぜ、立体感を出したあんこうを見て、日頃言葉数の少ない師匠も「作品が強い」と称賛し、「新人の女性でこれだけのものを作る人は少ない」とまで言ってくれた。展示会に沼田さんの作品が並んだ際は、多くの来場者が足を止めたという。職人にとって、何よりの励みとなる光景だ。

伝統工芸を受け継ぐ道のは、たやすいものではない。しかし、その道を照らし導いてくれる光がある。その光を目標として、ひた向きに歩み続けた先には必ず、憧れた景色が広がっている。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

取材を終えて

師匠の角田さん曰く、沼田さんは「とても頑固」だそうで、それは工房での仕事ぶりからもうかがえました。自分が納得できないらば、軽々しく「はい」と言わない。こうやりたいと思えば、たとえ失敗しようとも自分の意志を貫き通す。技を極めるためにはそういった頑固さも大切、そんなことを改めて感じさせてくれた若き職人さんでした。

※2010年10月取材。
掲載内容は取材当時のものです。

Profile

沼田 英恵

会津塗・加飾職人。1986年茨城県日立市生まれ。高校卒業後、故郷を離れて一人、会津若松市に移り住む。現在、師匠の下で沈金技法の継承に研鑽を重ねている。

